

巨乳！巨尻！
ムッチム千太もも！
発育最高
未来の身体測定

頭頂部がうっすら禿げた白髪混じりの髪の毛にやせ細った体幹、聴診器を持つ手は老いによる症状でかすかに震えている。

そんな老いぼれ内科医の山宮（やまみや）だが、この日は楽しみで仕方がなかった。

老齡にしてなお楽しみな時間。

この日は有名私立〇学校の身体測定の日なのだ。

老いてなお、まだまだ性欲は現役。死ぬその直前まで男としての本能は残っているということだ。

男子生徒などには興味はない。もっぱら女の子！！

山宮にとっては、もはや大人と何ら変わらないムッチムチの肉体を持つ女子〇学生たちの裸を拝める特別な日であった。

時は西暦〇□△〇年。

男子女子に関わらず昔とは見違えるほどの発育ぶりを子供たちが見せているのは、食べているものの栄養が違うからだろうか。

とにかく街を制服で歩く女子〇生や女子〇学生をみると、相当大人びているのが現状。更には〇学生に至っても、お尻や胸部が大人顔負けの子も多い。

この日は聴診器で心臓音を調べ、喉頭を検査するほか、ついでに太ももの裏にチクリと痛い筋肉注射をする。近年蔓延っているウイルス性肺炎の予防注射だ。

時計の短針が午前9時を回った。

背もたれのない小さな回転椅子に座り、山宮は今か今かとその時を待っていた。

この〇学校の中でも断トツで可愛くてスタイルの良い女子生徒が多いことで有名な、3年5組の女子生徒たちの測定の時間がやってきたのだ。

賑やかな話し声が聞こえてくる。

生徒たちが3階にある保健室に向かって階段を上ってくる。

「キャハハハッ！！で、彼氏のアツヤはどう言ってたのよ??」

「いつまでも待ってんじゃねえって怒ってたみたいよ！！」

「ハハハッ！すっごいウケるう！最高じゃんその話！！」

・・・ガヤガヤ・・・ワイワイガヤガヤ・・・ガヤガヤ・・・

多人数のキャピキャピした女の子たちの声。

少しバラバラになりながらも、順にゾロゾロと女子たちが保健室へ入って来た。

「それでは皆さん！心音測定とお注射をしますので下着になってくださいねっ」

山宮の付き添いの看護師の女性が女子たちに告げる。

“ゲッ！！ジジィじゃん・・・やだなあ、なんかキモい・・・”

準備万端といった感じで聴診器を持って待ち構える山宮の姿を見て、女子たちは決して大声ではないが、嫌そうな表情を浮かべてひそひそと愚痴る。

当然ながら、卑しい魂胆が表情に浮かび上がっている男の老人医師に自らの発達途上の肉体を調べられたいと思う女子生徒などいないのだ。

しかし今日は一斉検診の日。

嫌だからといって避けるわけにはいかず、女子生徒たちは次々と制服を脱いでいく。

どうせすぐ終わる。

そんな感じでそそくさと制服を脱いで、ほとんど全員が下着姿になった。

足の部分に注射をするという内容も聞いていた生徒たちは、ちゃんと上だけでなく下も下着になった。

ブラジャーから今にもはみ出しそうな巨乳。ほとんどの生徒が巨乳だ。

または、スポーツマンらしい引き締まった“そこそこ大きい”程度の健康的な乳房の女子生徒たちもいたが、そんな女の子は一方で太ももが肉感的で健康的でムッチムチ。

皆、どこかで釣り合いが取れている。とにかく皆一人も欠けることなくバランスの良いエロい肉体を持っているのだ。

“美味しそうな体だ・・・”

山宮はゴクリと唾を飲み込みながら、心のうちでこっそり呟いていた。しかし、まだ山宮には言わなければならないことが残っていた。

「コラコラァッ！！ダメダメ！！」

大声でそう叫んだエロハゲ医者の方を、怪訝な顔をして振り向く女子生徒たち。

「下着も脱ぐんだよ！！ほらぁ！！」

——マジッ！！？？——

皆一様に不快の表情を露わにし、お互い顔を見合う。

「あっ・・・せ、先生！ブラジャーも脱がしますか??」

看護師が山宮に尋ねると、深く頷いて言った。

「心音が下着の上からちゃんと聴こえると思ってるのか？言うまでもない基本だろう！検査をしにきたんだぞお！」

——体験版はここまでです——